

タイトル	文字の起源：古代オリエントの文字からギリシア・アルファベット文字へ(退職記念)
著者	桑原，俊一
引用	北海学園大学人文論集，42：127-160
発行日	2009-03-25

文字の起源

— 古代オリエントの文字からギリシア・アルファベット文字へ —

桑 原 俊 一

キーワード：トークン、楔形文字、エジプト文字、子音文字、アルファベット文字

はじめに

文字の起源と拡張について論考するとき、決まって出てくる常套的疑問は、文字とは何か、そして文字はいつ、どこで誕生したのか、という問であろう。またヒトは文字を所有することによって得た積極的評価ばかりでなく、同時に元来人間存在に本質的であった何かをそぎ落としてはいないかどうか、問わるべきであろう¹。こうした文字と人間との関与の射程を

学術雑誌等略記号は(1) *The Assyrian Dictionary of the University of Chicago*, ed. Martha T. Roth, et.al. (Chicago, the Oriental Institute, 2005); (2) W. von Soden's *Akkadisches Handwörterbuch*, (Otto Harrassowitz, 1966-1981); (3) R. Boger's *Handbuch der Keilshriftliteratur* vol. 1 (Berlin, 1967), 661-672. に準拠する。

1 本稿ではこの問題には直接言及しないが、ソクラテスが指摘している文字の二面性は興味深い。文字の発見者エジプトのトトはお褒めのことばを賜ろうとファラオのもとにやって来ると、王は言われる。「..... トトよ、技術を生むことのできる者と、それをういようとする人々に毒害をあたえまた利益を与えるいかなる定めをもっているかを判定する者と、は別のものございます。今あなたは文字の父として好意のゆえに〔文字の〕効力とは反対のことをおっしゃいました。なぜならこれを学ぶ人たちの霊力のなかに忘却を起

意識しつつ、本稿は文字対象を主要な文字体系の一つである肥沃な三日月地帯——西アジア²——で発生した文字状況に限定して検討する。

印欧諸語の比較言語学的祖語の問題は別として、文字を形態から検討するとき、印欧諸語の文字はその祖先をギリシア文字に求めることができる。では、いかにしてギリシア・アルファベット文字は誕生したのであろうか。この問いにはかなりの確実性をもってギリシア人はフェニキア子音文字(カナン語の文字)を採用したと信じられている。ギリシア人はギリシア語の音声に必要な母音文字を子音文字からに転用し、不足した子音文字については改変あるいは創出したのである。子音文字からの母音文字へ転用それ自体も、その後の印欧諸語の文字がほぼギリシア・アルファベット文字を母体とした分枝であることを考慮すると、確かにギリシア・アルファベット文字の誕生は一つの歴的出来事であったに違いない。したがって、この地域の文字状況を勘案すると、西アジアを起源とする文字の歴史においてギリシア・アルファベット文字は西アジア文字史の一つの頂点に立つといってよい。

では、いったいギリシア・アルファベット文字はいつごろ、どこで成立したのだろうか。この問題は今もって明らかではない。この種の問題はギ

こさせるだろうからです。,,,,,あなたは記憶の薬ではなく思い出しの薬を見出されたのです。で、あなたは、学ぶ者たちに知恵の真実ではなく、知恵のおもいなしをもたらされたのです。というのは、かれらはあなたに教えられることなしに多聞の者となって、実は多くのことについて無知でありながら、多識の者であると思うでしょうから、そして、知者でなくて、うねぼれ知者になってしまうために、交わりにくくなるであります」と。副島民雄訳「パエドロス」山本光雄編『プラトン全集』3、角川書店、1973年、329-330頁 参照。

- 2 本稿で使用する地理的用語「西アジア」は、「古代オリエント」が指示する範囲—肥沃な三日月地帯—メソポタミア、アナトリア、シリア、イスラエル、エジプトなどの地域である。もっとも現在はヒッタイト学やエジプト学は独立した学問領域になっており、一般的に西アジア、古代オリエントから区別されている。

リシア文字に個別の課題というより、むしろ文字学に内在する課題といえよう。ギリシア文字の場合、西アジアにおける文字の歴史から俯瞰するならば、ギリシア・アルファベット文字は単なる新参者にすぎなかったのであり、ギリシア文字案出に遡る 2000 年以前に、すでに文字装置システムは西アジア——古代オリエント——に誕生していたのである。そこで本稿では西アジアの文字の創出からギリシア・アルファベット文字成立に至る経緯を検討対象としたい。

1. トークン

多くの文字は絵文字を基幹として創出されたと考えられてきた。実際近年にいたるまで「すべての文字の根底には絵がある」とする I. ゲルブ説が定説であった³。確かに西アジアに誕生した文字、楔形文字（シュメール・アッカド文字）からエジプト聖刻文字、さらに北西カナン文字からギリシア文字にいたる書字には絵文字から象形文字、そして子音文字へと発展していったと想定できるとすれば、その根底に絵が存在することは確認できる。これに対してゲルブ説に異議を唱えるトークン説の反論が提出された。文字の起源をトークンとする説は 1980 年代にはじまるが、今日では否定的見解もあるものの一説として注目に与える。トークンとは火で硬く焼成された差し渡しが 1 センチから 3 センチほどの小さな粘土製品である。大型ともなると 3 センチから 5 センチになるものもある。様々な形状をしていて、円錐型、球型、四角形型など主要な型に分類しても 16 種を数える⁴。

トークンの使用年代は前 8000 年紀か 1500 年紀と長期間にわたっている。しかもこれらの膨大な数のトークンは西アジア全域、つまりメソポタ

3 I. Gelb, *A Study of Writing 2* (Chicago, 1974), 62.

4 デニス・シュマント＝ベッセラ 小口好昭／中田一郎訳『文字はこうして生まれた』岩波書店、2008 年、17 頁参照、なお図は同書 20 頁及び 76 頁を参照。

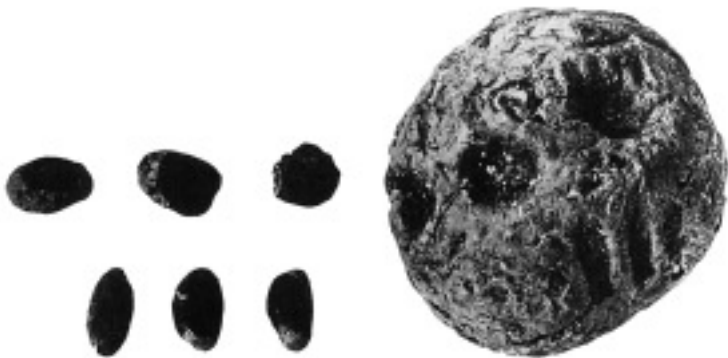
ミア、イラン、イスラエルからインドのインダス流域と広範囲に及ぶ。西アジアは粘土が豊富で、比較的簡単に作成でき、乾燥・高温のこの地域では取り扱いが容易であったことから普及した。この事実は、トークンの使用目的が交易に伴う物資の数を示す伝表のような役割があったと推測させる。初期のトークンはプレーン・トークンといわれ、トークン上に刻線や凹みをつけたものは極めて僅かにしか発見されていない。前 3500 年頃になるとコンプレックス・トークンという形状も多様化され、その上に 2 本の平行線や線状の刻印が記されるようになる。狩猟・採集民から農耕・牧畜を生業とする定住生活の移行に伴い官僚制が導入され、神殿を中心とする都市生活が始まる。シュメールの古代都市ウルクでは物資の数量を正確に計量する必要があり、その結果として度量衡制度の画期的発達が進められた。会計帳簿を正確に記載する必要が不可欠であったのである。

トークンからブツと呼ばれる球形を持つ粘土製の包みが作成された(封球)。その中にトークンを閉じ込め、外側に数の分類を示す記号が刻印かあるいは押印されるようになった。ブツの外側から中身の種類や数量を把握することが可能となったのである⁵。こうしたトークンの発展段階

	トークン・タイプ	絵文字	整理番号	訳
	3:14		ATU 803 ZATU 482c	1. 動物 子羊
	3:51		ATU 761 ZATU 575	羊 (図 25)
	3:54		ATU 763 ZATU 571	メス羊
	14:3		ATU 45a ZATU 12	メス牛

5 同上, 54 頁の図 15 を参照。

は、デニス・シュマント＝ベッセラによれば、計算具の発展段階を示すものだとし、これらのトークンから文字への移行が行われたと主張している。つまりトークンと文字との間には相関関係：(1) 1対1の対応、(2)具象的計算、(3)抽象的計算、が認められるとし、文字はこの抽象的計算から生まれたと提案している⁶。トークンは数量を表す単純な記号から楔形文字の複雑な表語記号の2種類の基本形を持つ以上、彼女の提案は文字誕生の理由について一石を投じたといえるだろう。ただこの説の問題点は、楔形文字シュメール・アッカド語の場合、1500 から 600 個もの記号があるのに対し、トークンの記号と楔形文字との対応関係が認められる説明は限定的であること、さらに楔形文字の誕生の地は、明らかにメソポタミア南東部に位置するシュメール地方であって、前述したようにトークンの出土地域はインドからメソポタミア、アナトリア、シリア、イスラエルといった広範囲に及んでいる（ただし、エジプトからは出土していない）こと、などが挙げられる。ただ西アジアに展開して文字の歴史から観察する限り、トークンやブラの使用と楔形文字との間には、相関する基本記号が見られることや尖筆で粘土上に記しを刻み込む手法は同じであり、相互が無縁に登場したとは考えにくい。したがってトークンの存在が楔形文字の創出に何らかの影響を与えた可能性まで排除できないとおもわれる。



6 同上、115～117 頁参照。

2. シュメール・アッカド楔形文字

最古の粘土板はユーフラテス下流域の古代都市ウルクから出土したもので、ウルク IV 期の前 3500 年頃のものと考えられる。この粘土板は初期の段階を示していて、記号の多くは具象的絵文字（人、家畜、石、木製の道具、魚、乳製品、織物）と数（1/2, 1, 10, 60, 600, 3600）を表す単純なしるしから構成されている⁷。トークンやブラの使用と時代的に共存したことから、記号（表語文字）を単純に並べただけのものにすぎず、現象としてはメモ伝票のようなものであった。

初期の粘土板から約 1500 個の表語文字が確認されている。それぞれの記号が何を表しているのか具象的線描からその意味は容易に把握できても、これらの組み合わせは単なる記号の羅列に過ぎず、抽象化された概念や（送り主と受領主など）必要な名前を書きつけることはできなかった。やがて表語文字は 1 対 1 の対応ばかりでなく、複数の意味を持たせることができ

7 シュメール古拙文字で書かれた粘土板の 1 例。吉川 守 責任編集『大英博物館 1 メソポタミア文明』日本放送協会、1990 年、34 頁参照。楔形文字の発展と変化についてはルイ＝ジャン・カルヴェ 矢島文夫監訳『文字の世界史』河出書房新社、1998 年、47 頁 図 3 参照。

大麦の会計簿「シュメール古拙文字」



楔形文字の変化

無	羊	牛	米	麥	麥	麥	麥	1. 星
田	田	田	田	田	田	田	田	2. 土地
人	人	人	人	人	人	人	人	3. 男
女	女	女	女	女	女	女	女	4. 女（女陰）
山	山	山	山	山	山	山	山	5. 山
奴隸	奴隸	奴隸	奴隸	奴隸	奴隸	奴隸	奴隸	6. 奴隸
頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	7. 頭
口	口	口	口	口	口	口	口	8. 口
パン一切れ	パン一切れ	パン一切れ	パン一切れ	パン一切れ	パン一切れ	パン一切れ	パン一切れ	9. パン一切れ
食べる	食べる	食べる	食べる	食べる	食べる	食べる	食べる	10. 食べる
川	川	川	川	川	川	川	川	11. 川
飲む	飲む	飲む	飲む	飲む	飲む	飲む	飲む	12. 飲む
足	足	足	足	足	足	足	足	13. 足
鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	14. 鳥
魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚	15. 魚
雄牛（の頭）	雄牛（の頭）	雄牛（の頭）	雄牛（の頭）	雄牛（の頭）	雄牛（の頭）	雄牛（の頭）	雄牛（の頭）	16. 雄牛（の頭）
雌牛（の頭）	雌牛（の頭）	雌牛（の頭）	雌牛（の頭）	雌牛（の頭）	雌牛（の頭）	雌牛（の頭）	雌牛（の頭）	17. 雌牛（の頭）
穂	穂	穂	穂	穂	穂	穂	穂	18. 穂

るようになる。

「足」の記号は「歩くこと」、「立つこと」や「運ぶこと」を意味した。さらに、「口」の記号は「話すこと」、「口」の右下に「パン」の記号を添えて「食べること」のように、複数の記号を用いて一つ概念を言い表すことができるようになる。しかし一つの記号に複数の意味をもたせたり、複数の記号の組み合わせによる書字法を体系化するためには音韻を弁別しなければならなかった。そうしなければ言語の主要な機能である伝達機能を十分発揮することはできないからである。つまり都市社会の発展と交易による商取引の拡大に伴い表語文字システムから表音文字（実質上音節文字を採った）システムへ移行する必要があった。シュメール語の表語文字は表音文字に完全に移行することはなかったが、体系化に必要な形態素（意味）と音素（発音）に分離し、表語と表語の間に文法的に必要な音価をもつ楔形文字を当てることにした。

音声を書字にするのに筆記具が尖筆から葦の筆に変わったことで、文字の形状にも大きな変化が見られる。線状に刻印されていた文字は所謂楔形をした文字へと変化し、文字としての利便性が飛躍的に高まった。このとき字形は90度横転して書き記されるようになる（注7 図表楔形文字の変化を参照）。こうした文字化の道が開かれる時期は前2500年頃で、そのころから楔形文字は一つの体系を持つ文字組織として成立したことになる。文字数は1800個ほどから最終的には600個⁸程度まで縮小された。それにもかかわらず、文字の習得はそう簡単ではなかった。一文字が複数の語を表したりと、その音声は複雑であった。そのために音声補助文字や意味を明確にするための限定詞が使用される。文字の獲得には長期にわたる学校での訓練を要求された。いつ頃成立したか不明ではあるが、前2500年頃にはエドッパと呼ばれる書記学校の制度が確立されていた。シュルツパク（現

8 現在、楔形文字の習得に欠かせない標準的なアッカド語銘文記号一覧によれば598語が収録されている。R. Labat, *Manuel D'Épigraphie Akkadienne*⁵ (Paris, 1976).

名ファラ) などから教材として文字集やその後に発展した語彙集として纏められた。版を重ねながら縮約版も作成された。百科全書ともいえるべき語彙集も存在し、見出し語は8000を超えるものまである。特に古バビロニア期(前2000—1600年)からは多くの書記学校に関するテキストが出土している。こうした教材や試験、学校での日常を書き記した対話編からは当時の学校教育の厳格さがきわだっている。こうした粘土板は膨大な数にのぼる⁹。

シュメールの地にセム系民族が侵攻し、楔形文字を受容したときから、楔形文字はシュメール人の手を離れ、セム語(16頁以下詳述)¹⁰の文字となった。しかしセム系民族(アッカド人、バビロニア人、アッシリア人)が支配するようになってからも、シュメール語・文字は長く古典語として生き続けた。つまり書記の学校ではシュメール楔形文字とセム系楔形文字の2言語併用¹¹(時には3言語)教育が一般的であった。最終的にはセム系民族の言語に適應した音節文字へと移行した。そして楔形文字はマケドニアのアレキサンダー大王の東征(前4世紀)によって終焉する。

楔形文字の使用はシュメール人とメソポタミアのセム人だけの文字ではない。周縁諸国の文字にもなった。アナトリアのヒッタイト王国¹²において

9 拙論「古代社会の教育」——メソポタミアの資料を中心に——『年報新人文学』5(2008年)32-88頁において言語教育とりわけ人文教育の系譜を前2000年紀の諸資料を中心に検証した。

10 今日、セム語族という用語はアフロ・アジア系語族という大語族に包括されているが、楔形文字を使用したセム系民族はメソポタミアに居住した民族で、東セム語族に属する。

11 シュメール語とアッカド語による2言語併用「辞書」で、前1750年頃のもの。左の欄がシュメール語で右がアッカド語。

スティーブン・ロジャー・フィシャー『文字の歴史』69頁。図33参照。

12 ヒッタイト語は印欧語族に属するが、文字は聖刻文字と楔形文字が使用された。



も採用されたし、シリアのウガリット王国では楔形文字がアルファベット文字¹³として用いられた。そればかりか西アジア一体に興亡した国々においても採用された。したがって前 14 世紀頃の楔形文字は西アジアにおける外交上国際語（lingua franca）としての地位を確立し、エジプトのアマルナ書簡の大部分は楔形文字によるアッカド語で書かれた。今日これらの書簡は紀元前 14 世紀頃のオリエント世界の国際関係を知る上で、貴重な史料となっている。

3. 古代エジプトの文字

一般的にエジプトの文字とは 3 種類の文字で表出される。つまり聖刻文字（ヒエログリフ¹⁴）、神官文字（ヒエラティック）と民衆文字（デモティック）である。前 1900 年頃ヒエログリフを基礎としてヒエラティックが考案された。ヒエラティックからデモティックが案出されるのはずっと後世になってからのことで前 400 年頃である。ヒエログリフは事物の象形を端正な図像で文字化したものであるが、ヒエラティックとデモティックは筆記の必要性から線文字化が進められた、いわばヒエログリフの行書体や草書体である。古代エジプト人にとって文字は朱鷺の頭部をもつ書記、トト神の贈り物とされ、神のことであつて一般民衆とは疎遠なものであつた。エジプトでは初期王朝時代（前 3100—前 2686 頃）以来、一言語が民族の言語でもあり、かつ文字でもあり続けた。この事象はメソポタミアに誕生した楔形文字とは対照的である。メソポタミアの場合、上記で言及したようにシュメール文字からカッカド文字へ、更に周辺諸国の文字として採用さ

13 北西セム語に属するウガリット文字については後述 21 頁以下参照。

14 ギリシア語のヒエログリュフィカ（hierogluphika）に由来する。名称者はアレキサンドリアのクレメンス（2 世紀の神学者）である（Stromata V.IV. 20-21）。彼はこれほど優雅で魅力的な文字に出会ったことはないと絶賛し、その影響の大きさを指摘している。

れ、多様な楔形文字を生み出した。ごく大雑把に言えば、エジプト文字は 3000 年間ほぼその字形を保持し続けたのである。

地理学上エジプトはメソポタミアとは、一時の停滞期を除いて、比較できないほど保守的で安定した国政を保持することができた。しかしそのことはエジプトが他のメソポタミアやアナトリア、レヴァント地域と交流がなかったことを意味しない。むしろエジプトの保守主義は他国との交易関係を安定的に確保し、繁栄を築き上げた。

先王朝時代の前 3400 年には稚拙ながらシュメール人が到達したレブス (判じ絵)¹⁵ 式のヒエログリフに発達した可能性はあるにしても¹⁶、表語文字と表音文字の形体を整えた文字のシステムは上エジプトと下エジプトを統一した初期王朝時代に考案されたとおもわれる。ヒエログリフの発明はエジプト人が独自に獲得したものなのか、あるいはシュメールの古拙表語文字 (ウルク期) に発想を得たものなのか、いずれにしても推測の域を出るものではない。しかし多くの研究者は、エジプト・ヒエログリフはシュメール人からヒントを得て誕生したと考えている。現在のところ文字の歴史からすれば、シュメール文字の出現はヒエログリフに先行したことは確かである。加えてレブス (判じ絵) 式で読める形体のヒエログリフ文字はシュメール古拙文字と発想の類縁性を示すのは事実だとしても、そのことが直ちにヒエログリフがシュメール文字から文字という忘備手段を借用し

15 rebus とは数個の記号を合わせ持った文字で構成される表語文字のことである。

16 上エジプトと下エジプトの統一以前の初期ゲルゼー文化期 (前 3400 年頃) にアビドス (カイロから南に 500 キロ) でヒエログリフと呼称されるに相応しい文字が使用されていた。スティーブン・ロジャー・フィシャー 鈴木晶訳『文字の歴史』研究社、2005 年、46-47 頁を参照。近年になってルクソール近郊ナイル川が湾曲するカナ・ベンドゥ地区から西のオアシスに通じる砂漠の道の岩山から沢山の刻文が発見されている。それらは明らかに初期王朝時代からコプト時代に属する。Jone Darnell, *Theban Desert Road in the Egyptian Desert* vol. 1, ASOR 119 (2002), 8.

たとは考えにくい。(1)なぜなら文字の誕生に関して言えば象形から文字に発展することは一般的に認識できる現象だからである。(2)シュメール文字と異なりヒエログリフは母音文字を持たなかった。(3)更に付け加えられなければことは、メソポタミア、アナトリア、インダス流域からシリア・イスラエル地方に広く認められるトークンがエジプトからは全く出土していないことである。(4)メソポタミアにおいてトークンから文字へ移行したとする提案は、エジプトの場合には妥当しない。トークンの使用を欠くヒエログリフの考案はヒエログリフが孤立して、独自に誕生した可能性を示すともいえる。

文字史上画期的出来事がエジプト文字の発展に認められる。この出来事は後述するフェニキア文字に先鞭をつけたという点で際立った特徴といえるであろう。つまりヒエログリフの文字形成の一つが後のアルファベットの発想をフェニキア人に与えたと考えられる。シュメール・アッカド楔形文字は表語文字と表音文字も結局は音節文字の領域をでることはなかったけれども、ヒエログリフは頭音法（アクロフォニー：Acrophony）の着想によってエジプト語に必要であった子音文字の考案に至ったのである。この原理は単語（記号）の最初の子音だけを文字として使用するもので、例えば、記号「脚」は本来単語/bw/と読まれたが、子音文字bとして用いられた。このような単子音文字はヒエログリフ約 700 文字中 26 個ほどの文字を数える¹⁷。しかしながらエジプトにおいては子音文字単独の文字体系を持つことは決してなかった。なぜ純粋な子音文字へ移行しなかったのか、あるいはむしろ混成文字体系を好んだのか議論はされてきたが、問題の結論には至っていない。事実としての残滓は、エジプト人は表語文字と表音文字の混合した複雑な体系を維持続けたということである。つまり①単子音文字、②2 子音・3 子音からなる文字、③発音を明確にするため、あ

17 後述する子音文字を検討する際の参考としてエジプトの単子音文字の音価を例示しておく。但し、変形体の記号が存在し、それをどう数えるかで多少変わる。

るいは強調させるための音声補助文字（単子音文字を用いる：ことば「単語」の後に1文字が付加されるが、2文字や3文字のこともある、④意味の曖昧さを減少させるため限定詞（表音文字の最後に付加する）となる文字を使用した¹⁸。

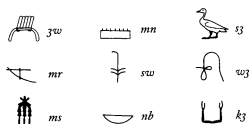
4. フェニキア文字¹⁹

たとえフェニキア人がヨーロッパ諸語の文字表記を可能にしたアルファ



- 18 アルベルティーン・ガウアー 矢島文夫／大城光正訳『文字の歴史』原書房、1987年、72頁-75頁参照。R. K. Ritner, 'Egyptian Writing,' Peter T. Daniels and William Bright (eds.), *The World's Writing Systems* (Oxford University Press, 1996), 72-87.

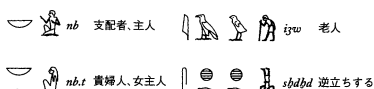
2子音からなる文字の例



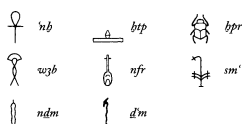
1文字の発音補助文字の例



限定詞の例



3子音からなる文字の例



2ないし3文字の音声補助文字の例



- 19 拙論「文字から探るフェニキア語の世界」『言語』vol.37. No.12 (2008), 84-87頁参照。

ベット文字の最初の考案者であったことを知ったとしても、フェニキア人ないしフェニキア語あるいはフェニキア文字から推測できる地理的領域を的確に指し示すことはそう簡単ではない。古代の東地中海沿岸部に位置した地名であるということができて、その確かな境界線を引くことはむしろ困難だというべきだからである。東地中海の沿岸部に存在し、レバノン山脈から西の南北に細長く伸びた領域であったというだけでは誰も納得しないだろう。もう少し正確に叙述するとすれば、フェニキア本土は、北は現在のシリアのタルトゥース近辺から南はパレスチナ（現在のイスラエル）のカルメル山いたる海岸沿いの細長い地域で、小さく見積れば、ほぼ今日のレバノンを多少大きくした程度であったとおもわれる。旧約聖書やエジプトなどの資料から知られている都市として北から南へ、アラドゥス（アルワド）、シミラ（ツェマラ）、トリポリ、ゲバル（ビブロス）、ペーロト（ペリスト、ペールート）、シドン、サレプタ、ティルスが確認められている²⁰。これらの諸都市は前 15 世紀頃から都市国家を形成し始め、前 10 世紀頃から地中海の海上貿易が盛んになる。後にはカルタゴ（フェニキア語で‘新しい町’を意味する）などの植民地を地中海沿岸の各地に建設し、果ては北アフリカ西岸にまで海上交易の版図を広げた。前 2000 年中葉から末期（後期青銅器時代）にかけてエジプトやバビロンなどの古代帝国が衰退し、それに乗じて新しい歴史が始まった。陸橋にあたる地域に居住していたフェニキア人（ヒブル人やアラム人も同様）は、陸上・海上の交易にともない古代オリエントが生み出した文明を受容し、また改良・改善を加えて、フェニキア文字などを地中海世全土に伝え、ついには古代ギリシア・ローマを発展させる原動力となったのである。

4.1. フェニキアという名称について

一般的にフェニキア人の居留地がギリシア語で *Φοινίκη* (Poinikē) と呼

20 D. J. ワイズマン編（池田 裕 監訳）『旧約聖書時代の諸民族』日本基督教団出版局、1995 年、362-363 頁参照。

ばれたことに基づいている。確かにギリシア人は海洋の住民たちをフォイニコイ (Phoinikoi 紫の民) と呼んだが、この名称は沿岸から獲れる巻貝の紫色の染料を特産としていたことから付けられた。フェニキアとエジプトは政治的にも経済的にも関係が深く、文字との接触も日常的であったことから、このギリシア語は音素との関連からエジプト語と結び付ける試みもなされてきた。しかし旧約聖書やエジプトの諸資料から確認できることは、彼らをまとまりある一民族としてよりは、諸都市の住民の名称である「ゲバル人」「シドン人」などとする一方で、基本的にフェニキア諸都市の住民を「カナン人」であった、としている²¹。したがって、もともとフェニキア領域に居住していた人々には「カナン人」という用語が使われていたとおもわれる。「フェニキア」と「カナン」との間には語源的に興味深い関係があるようにおもわれる。ギリシア人のいうフォイニコイ「紫の民」の地は、アッカド語資料（アマルナ書簡）に出てくる (māt) kinahhi (紫の民の地) と同定してよいものかどうか。アッカド語 kinahhu はフルリ語(非セム語)の派生語 knaa と言われてきたが、kn'n の綴りは前15世紀頃のエジプトや14世紀頃のウガリット文書にも見られることから元来セム語の派生語であった可能性が高い。ヒブル語の語根 kn' には「服従させられる」の意味があって、創世記(9:18-27)に「カナンはセムの奴隷となれ」とあることから「カナン」の語源をセム語に求めることも無理ではない。更に旧約聖書において「カナン」は商人、交易の民として出てくることもセム語の派生語である可能性を支持する²²。

4.2. 子音文字装置発明の経緯

メソポタミアの文字とエジプトの文字は700個から600個ほどの文字記号から構成されていた。これらの文字は、絵文字・象形系文字から発達した表語文字が主要な文字であったが、意味の最小単位である形態素として

21 同上、359頁参照。

22 ゼファニア書1章11節等。共同訳『聖書』では商人と訳出している。

の記号（表意文字）であつたり、同じ記号がただ音節のみを表す音素（表音文字）であつたりした。あるいは一つの記号が複数の音素から構成されたレプスを示したり、さらには一つの音素が複数個の記号で表されたり、さらには単語の意味の曖昧さ無くすために限定詞を付す、といったきわめて複雑な文字体系を維持し続けた。ただし音価の相違は限られていたため、たいていの場合文脈から意味の把握はできたのだが。

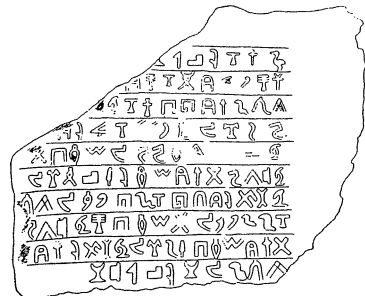
言語的にフェニキア人は他の古代中近東の諸民族と同様に、系統的には様々な民族と混交していたが、フェニキア語を話し、ヒブル人と同じくカナン人の系統を引く民族であった。フェニキア子音文字が歴史的かつ革命的出来事といわれる所以は、記号の数 700 ほどから 22 に激減することができたことにある。換言すれば、フェニキア文字は、既存の 2 系統が持つ煩わしい混成文字体系から開放したのである。象形文字から簡便な 20—30 個の子音文字のみで全ての単語を表記できる道を切り開いた。この出来事は極めて大きな歴史的進化というべきであろう。フェニキア地域からは 2 系統の文字碑文が知られている。時代的には前 18 世紀に属するビブロスの擬似聖刻文字²³と前 10 世紀のアヒラム王石棺碑文²⁴などのフェニキア線

23 矢島文夫「ビブロス文字」河野六郎、千野栄一、西田龍雄 編「別冊世界文字事典」『言語学大事典』三省堂、2001 年、806-807 頁表、図 1 参照。

文字表の一部

YI	o	»	w ₄	𐤀	l ₄	𐤁	r ₁
𐤁	o ₁	𐤂	z	𐤃	m	𐤄	r ₂
𐤅	o ₂	𐤆	z ₁	𐤇	m ₁	𐤈	r ₃
𐤉	o ₃	𐤊	z ₂	𐤋	m ₂	𐤌	s
𐤍	o ₄	𐤎	z ₃	𐤏	m ₃	𐤐	s ₁
𐤑	o ₅	𐤒	h	𐤓	n	𐤔	s ₂
𐤕	o ₆	𐤖	h ₁	𐤗	n ₁	𐤘	s ₃
𐤙	o ₇	𐤚	h ₂	𐤛	n ₂	𐤜	t
𐤞	b	𐤟	j	𐤠	n ₃	𐤡	t ₁
𐤣	b ₁	𐤤	j ₁	𐤥	c	𐤦	t ₂
𐤨	b ₂	𐤩	j ₂	𐤪	c ₁	𐤫	t ₃
𐤬	b ₃	𐤭	j ₃	𐤮	c ₂	𐤯	t ₄
𐤱	g	𐤲	x	𐤳	p		

石柱に刻まれたビブロス擬似文字



さらにセム語派は以下のように細分化できる。文字との関係についても簡略に触れておく必要がある。

東セム語：アッカド語、バビロニア語、アッシリア語。これらの言語はセム語派であるが文字としては前述のように楔形文字を採用した。これについては既に言及した。ただし楔形文字を生み、発展させたのはシュメール人である。東セム語派は楔形文字を継承し、発展拡大させた。シュメール語は非セム系の言語であり、その語族としての帰属は今なお不明な孤立言語である。前述のとおり文字体系はシュメール・アッカド楔形文字の基盤となった。

西セム語：カナン語（フェニキア語、ヘブル語、モアブ語、ウガリット語、エドム語など）、アラム語。これらの言語はウガリット語を除いて、カナン子音文字を使用した。ウガリット語はカナン語と同語派の子音文字を採っているにもかかわらず楔形文字を採用した。この理由はウガリットの地理的要因が大きな原因と思われる。つまりウガリットは北西セム語の北に位置し、周辺諸国がほぼ楔形文字を採用していた影響であろう。しかし元来北西セム語派に属する言語であることから、シリア・パレスチナ地域に2系統のアルファベット表記が存在したことを示している。文字文化に関するかぎり、大国の狭間である不利な地理的要因が系統の異なる文字の考案という動力を生み出したといえよう。

南セム語：南アラビア語、エチオピア語。西セム語派と同系のカナン文字を使用した。

さて再びフェニキア文字に戻ろう。フェニキア文字が記号数を激減できた大きな理由は、北西セム語が子音文字で十分表記しうる言語であったからである。子音文字は文字記号の名称の頭字、つまり最初の一単音を音価とする文字から構成される頭音法（11 頁エジプト文字の項参照せよ）を発見した。その記号名称はおそらくエジプト聖刻文字のセム語訳に起因すると推測される。例えばエジプト文字 nt はセム語の mem でその意味は両者とも「水」であり、エジプト文字 drt はセム語の kap に対応し「手」を意味する。象形記号はエジプト文字（聖刻文字と神官文字）から採用された

ものがいくつも確認されている。子音文字の考案は文化史の射程からいえば、孤立的に誕生したというよりはその前史があったと考えるほうが自然である。すでに言及したように既存の文字文化と接触が深かったフェニキア人は、文字においても少なからずエジプト文字の影響を受けたことは確かであろう。シュメール・アッカド文字が明確な音節文字であるのに対して、エジプト文字は音節の母音が明確でなく、母音を伴う子音が母音を伴わない子音として使われるようになった。こうした文字の使用法は、頭音法による子音文字へ移行する道を開いていたにもかかわらず、エジプトでは採用されることがなかった。メソポタミアやアナトリアとエジプトの陸橋で大国の仲介者として生きてきたフェニキア人にとって魅力的であったに違いない。

4.3. 子音文字（アブジャドゥ：Abjad）アルファベットの誕生

1993年から1994年にかけて衝撃的な発見がエジプトから伝えられた。J. ダーネルが率いるエジプト考古学隊が二行の線文字を発見した²⁷。その場所はルクソール遺跡や王家の谷が隣接するテーベとアビュドスを結ぶナイル川の西の砂漠に開けた古代隊商の交易路上のワディ・エル・ホルである。文字は石灰岩壁に刻まれていた。さらにエジプト文字の影響を受けたカンアン文字と断定された。刻まれた時代は前1900—1800年代と特定されている。したがってワディ・エル・ホルの文字は解読には至っていないものの

27 ワディ・エル・ホル碑文

16文字右から左に読む

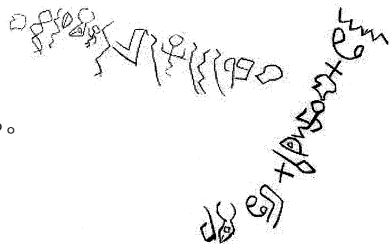
rxmp?h₂θgn h₁wnqbr

12文字は上から下方に読む

l?šgtn 'h₂rtšm

研究者の間で一部文字の読みは異なる。

Cf. B. Colles, "The Proto-alphabetic inscriptions of Canaan," *Abur-Naharain* 29 (1991).



最古の子音アルファベット文字ということになる。加えてカナン子音文字の発生は、カナン人の故郷、シリア・パレスチナから遠方の上エジプトで誕生したことになる。同地域から非子音アルファベット系エジプト文字も確認されている、J. ダーネルは単語がベビ（Bebi）という名前で始まり、彼自身“アジア兵の部隊長”と呼んでいる一つの文字碑文を発見した。この用語はほぼ外国人を意味し、カナン人で、多くは傭兵として仕えた人たちである。ときには鉱山の工夫であったり、商人であったりもした。ベビの名は他のパピルス文書にも見出されるという。J. ダーネルは、間違いなく最初期のアルファベット子音文字はエジプト在住のセム人が発展させたと結論付けている。さらに彼の推測によれば、常に兵士の把握が必要であったため傭兵の隊の書記がおそらく中王国時代（第11—12王朝）に一般的に使用されたエジプト文字（主としてヒエラテエク）を簡略化し、半ば筆記体風に書きつけたものである。とりわけ傭兵についていえば、彼らはエジプトでの生活が長期にわたって既に彼ら自身がエジプト化されており新参の同僚とも会話ができるほどであった²⁸。つまりセム語話者と働くことで書記たちはヒエログリフをアルファベットの原型となる子音記号に変容させたのである。解読はできていないが、幾つかの記号は同時に原カナンや原シナイ文字と近い関係にあることは確実である。

族長ヨセフの時代に多くのヒブル人がエジプトに居留したことは聖書以外に十分な資料はないが、エジプト中王国時代に属するワディ・エル・ホル碑文の発見はアルファベット文字との関係はもとよりエジプト内陸部に

28 J. Darnell and C. Dobbs-Allsoppe, et al., Two Early Alpjabetic Iscriptions from the Wadi el-Hol: *New Evidence for the Ofigin of the Alphabet from the Western Desert of Egypt*, ASOR 205 (2005).

ワディ・エル・ホル碑文については津村俊夫が訳者あとがきにおいて今後のカナンとエジプトの文化的関係を知る上で重要な碑文であると言及している。ヨセフ・ナヴェー（津村俊夫他訳）『初期アルファベットの歴史』（法政大学出版局、2000年）、233-234頁参照。

までアジア系、つまりカナン人が多様な形で存在したことの証左でもある。エジプト出土のアマルナ書簡(前14世紀)時代の国際語はアッカド楔形文字書かれたが、カナン語の単語も頻繁に出てくる²⁹。シュメール・アッカド文字やエジプト文字を持たなかったカナン人にとって文字は魔力的かつ魅力的であった。同時に子音文字も既に使用していたエジプト人にとって多様な西セム人との接触は商活動の会計記録や傭兵の管理に簡便な彼らの言語の文字化の利点は大きかったと思われる。こうした文字状況が相互補完的に原初の子音アルファベットを生み出したに違いない。ワディ・エル・ホル碑文の時代的枠組みを考慮するとエジプトにおいてアルファベット子音文字が最初に誕生した可能性もある。ただし碑文が断片的で、解読されていないことから今後のさらなる碑文の発見か、研究の成果がまつられる。

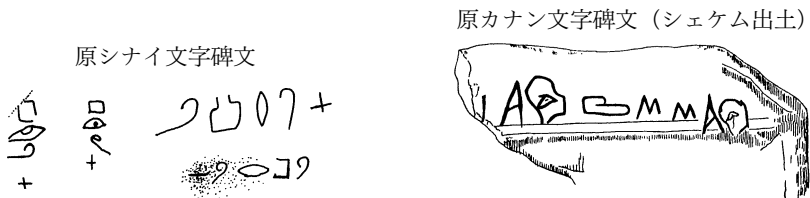
ワディ・エル・ホル碑文に近い子音文字の案出はパレスチナの原カナン文字碑文(前17世紀頃)やシナイ半島における原シナイ文字碑文(前15世紀頃)に認められる。当初注目を集めたのはシナイ半島のセルビット・アル・ハディームで神殿が発見された碑文である。神殿にはエジプトの女神ハトホルが守護神として祀られていた。奉納された小さなスフィンクス像の台座の左側に碑文が刻まれ字形は絵文字に近いが、明らかにエジプト文字ではなかった。発見から15年後A. ガーディナーによって解読の先鞭がつけられた。彼は頭音法によって文字をセム語で読むとそれらの文字はlb'lt「バーラット女神へ」であることが確認された³⁰。W. F. オルブライトはこの地域から30個ほどの同類の絵文字を採取した。それらのうち23個は子音アルファベット文字に向かう文字であると認定し、原シナイ碑文と呼

29 マリ王国(ユウフラテス河岸の西にあった古代都市)出土の膨大な粘土板からもカナン語の固有名詞など前18世紀の西セム語がどのような状況にあったのか知ることができる。いずれにせよシリア・パレスチナの西セム人はエジプトからメソポタミアにかけて広範囲に居留地を持つか、商人や傭兵などとして生活圏を保持していた。

30 ヨセフ・ナヴェー(『初期アルファベットの歴史』, 29頁図16; 32頁図18参照。

んだ。バーラット女神はフェニキアのビブロスで崇拝されていたのである。セルビット・アル・ハディームはトルコ石を産出する鉱山であり、エジプト人に雇われたカナン人やアジアからの人々が鉱夫として労働に従事していた。彼らは遠方より故郷の神に思いを馳せつつ重労働に就いていたのだ³¹。当初これらの文字が最古の真アルファベットとされていた。しかしその後パレスチナ（カナン）のシェケム、ゲゼルやラキシユなどからも同種の文字碑文が確認され、シナイ文字よりも更に古く前 17 世紀に属することが判明した。さらにこれらの文字からフェニキア文字などのカナン文字へと発展した。フェニキア子音アルファベットに至る特徴として以下の特徴が認められる。(1)この頃エジプト文字の知識を持つカナン人が頭音法を採用したこと、(2)子音数は元の来 27 文字から前 13 世紀までに 22 文字になったこと、(3)記号は象形であったが、次第に線状化が促進されて線文字となったこと(4)書く方向はまた定まっていなかったこと、が挙げられる。これらの文字の変種から文字数が 22 の子音文字に固定され、書く方向も横書きで右から左へと限定されたとき、フェニキア子音文字と呼べる文字が誕生し、この移行は前 1050 年頃起こったと推定される³²。

実際ヘブル語³³とアラム語の子音はフェニキア語のそれよりも多かったが、22 のフェニキア文字だけを使用した。つまりヘブル語とアラム語は



31 W. F. Albright, *The Proto-Sinaitic Inscription and their Decipherment* Harvard Theological Studies 22 (1966).

32 ヨセフ・ナヴェー（『初期アルファベットの歴史』、51 頁参照）。

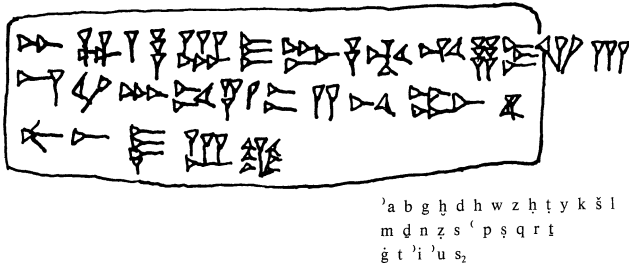
33 この時代のヒブル文字は線文字でパレスチナ文字とも呼ぶ。前 2 世紀頃アラム文字から分化し方形ヒブル文字が創られた。

フェニキア語に生じた音推移に順じて文字を使うことにし、それらの言語が本来もっていた子音文字は新たに考案することはしなかったのである。

原カナン碑文と原シナイ碑文はかなり断片的であり、十全には解読されていないのに対し、ほぼ同時代（前14世紀から前12世紀）の古代都市ウガリット³⁴と比定された楔形子音文字は解読済みであることから、ウガリット子音文字とフェニキア子音文字との関係が注目されてきた。ウガリット子音文字表³⁵は基本的に27文字を数えるが、終わりの3文字は後になって加えられ、2文字は母音字の書き分けに、そして最後の文字は外来語（フリ語³⁶）に用いられた。フェニキア文字はウガリット文字に比べると5文字欠けていることになる。詳細な西セム語の音韻体系と文字の関係や文字の配列はさておき、ここで重要なことは、ほぼ同時代にシリア・パレスチナ地域には原カナン文字と楔形カナン文字³⁷という二系統の子音文字

34 古代北シリア沿岸部に栄えた都市国家。アッカド語やヒッタイト語楔形文字テキストに混じって、北西カナン語に属する楔形子音文字で書かれた粘土板テキストが大量に出土した。現在のラス・シャムラ。

35 F. M. Cross, “The Invention and Development of the Alphabet,” W. M. Sennner ed., *The Origins of Writing* (University of Nebraska Press, Lincoln, 1989), 85. 図4参照。



36 前2000年紀に北メソポタミアにミタンニ王国を築いた人々の言語。多くは楔形文字で書かれたが、ウガリット語アルファベット文字で表された粘土板文書も知られる。言語の系統は非印欧語であるが詳細は不明である。ウラルトゥ語と関係がありそうである。

37 楔形アルファベット文字テキストはパレスチナのタアナクやナハル・タヴォルでも出土している。ヨセフ・ナヴェー『初期アルファベットの歴史』,

が存在し、原カナン文字の系統を引くフェニキア文字は生き残った一方、楔形カナン文字であるウガリット文字は都市国家の滅亡とともに失われた、という事実である。

フェニキア文字は母音表示を持たなかった。語中と語末のいずれにも母音代用文字 (*matres lectionis*) がなかった。アラム文字やヘブル文字がそれらを採り入れていったのとは対照的である。母音代用文字の導入がフェニキア文字に見られるのは後期のポエニ文字碑文、とりわけ新ポエニ文字碑文においてだけである。アラム人とヒブル人はより容易な読みを可能にするために、限られた状況で母音記号として、ヘー(h), ワウ(w), ヨード(y), ときにはアレフ(') さえ使用した。これらの文字における母音代用文字という名称からも明らかのように、フェニキア文字は子音のみを利用し母音を排除した子音文字体系であるため、同系の文字体系に属するセム語派のアルファベットをアブジャドゥ (*Abjad*) アルファベットと名称し、ギリシア文字以降のアルファベットと区別する向きがある。古アラビア文字の最初の四文字アブジャディ (*Abjadi*) 由来する名称である³⁸。子音文字体系の言語文字に完全に母音を付加されるのは紀元後になってからであり、したがってギリシア文字以降のアルファベット文字とフェニキア子音文字を区別するのは理由のないことではない。

フェニキア文字は3種類に分類される。フェニキア本土の文字、ポエニ文字、新ポエニ文字である。これらに認められる差異は言語的、つまり他のセム語同様、方言的のものであって、フェニキア本土の方言の他、ビブロス方言、ポエ方言、新ポエニ方言があった³⁹。ただ西地中海植民地で発達したポエニ語と新ポエニ語は明らかにフェニキア系カナン語からは異なるが、文字としては新ポエニ文字にはさらに進んだ線文字化が見られるもの

36 頁参照。

38 P. T. Daniels, (et al. eds.), *The World's Writing Systems* (Oxford, 1996), 4.

39 Z. S. Harris, *A Grammar of the Phoenician Language* (New Haven, 1936); S. Segert, *A Grammar of Phoenician and Punic* (Munich, 1976).

の地域との差は認められない⁴⁰。

初期フェニキア碑文の字体例として前11世紀末頃のビブロス出土のアヒラム石棺碑文、前10世紀ビブロスのヤヒミルク碑文やシフティバアル碑文等⁴¹が挙げられる。前10世紀と前9世紀になるとフェキア人の地中海各地への殖民にともない、彼らの文字は国際的な文字としての地位を獲得する。前9世紀の後期にはヤ(ウ)ディー-サムアル(キルキアと北シリアの境界に当たる。現代のトルコにあるゼンジルリ)の王キラム(ワ)・バル・ハヤは、固有名詞にはアラム語とアラム文字を使用しながらも、地域言語ではないフェニキア文字で自らの記念碑を書いている。前8世紀に書かれたキリキアのカラテベ出土のアズィタワッダ碑文はヒッタイト語の分枝であるルウィ語⁴²による象形文字とともにフェニキア文字との2ヶ国語で書かれた。フェニキア文字は前1000年紀初期に国際語・文字としての魅力をもっていたのである。南ではヒブル人が東ではアラム人がそれぞれフェニキア文字の使い手となっていった。前8世紀以降のフェニキア文字(後期フェニキア文字⁴³)は国際的に使用されなくなり、その地位をアラム文字に譲り民族の文字となった。

フェニキア文字碑文はフェニキアの中心地域ばかりでなく、キリキア、メソポタミア(ウル)、パレスチナ、エジプト、北アフリカ諸国、地中海諸島(キプロス、クレタ、マルタ、シチリア、サルデニア)、南欧(ギリシア、イタリア、フランス、スペイン)で発見されている。こうした様々な地域

40 ヨセフ・ナヴェー『初期アルファベットの歴史』, 71頁参照。

41 フェニキア文字碑文の多くは右の文献による。H. Donner and W. Röllig, *Kanaanäische und aramäische Inchriften*, I-III, (Wiesbaden, 1962-1964); J. C. L. Gibson, *Textbook of Syrian Semitic Inscriptions*, III: *Phoenician Inscriptions* (Oxford, 1982)。谷川政美『フェニキア文字の碑文』。

42 前2000年紀に小アジアの西部および南部で使用されていた言語で、印欧アナトリア語派に属する。

43 後期フェニキア碑文については、J. B. Peckham, *The Development of the Late Phoenician Scripts* (Cambridge, 1968)。

でフェニキア文字碑文が発見され、しかもある碑文は前 11 世紀にまで遡る、例えばサルデニアのノラで見つかった碑文とクレタの書かれた碑文である。フェニキアの海上貿易がいかに早くから広範囲に及んでいたかを示している。他方、フェニキア碑文がフェニキア本土を離れた各地で見られるのは、それらの大部分の地域に植民地があったことの証左でもあることはいうまでもない。

5. ギリシア・アルファベット文字とフェニキア文字

欧米文化の源流の一つとされる古代ギリシア文化は、近年の研究成果により以前考えられていたよりはるかに古代西アジア（オリент）文化の影響を強く受けて形成されてきたと認識されている。文学（とりわけ神話）の世界はもとより、文字の受容はその格好の例として挙げうるであろう。アルファベット文字装置の考案は文字の経済性と利便性のゆえに人類史における歴史的出来事として位置づけられ、おそらくそれは前 17 世紀以降に起こったと考えられている。フェニキア文字を起源とするアルファベット文字は諸言語の音韻体系に起因する多様な取捨選択を伴いながら、現代では広くヨーロッパ諸語を始め西アジア、さらにインドのカロシュティ文字にいたるまで広範囲に伝播されている。メソポタミアで楔形文字体系（シュメール・アッカド文字の総称）が、そして他方エジプトではエジプト文字体系（聖刻文字と神官文字）が存在していた。フェニキア文字はシュメール・アッカド文字が国際語（lingua franca）となっていた只中で誕生した。

初めてギリシア人とフェニキア人の文字について言及したのは、前 5 世紀後半のギリシアの歴史家ヘロドトスのである。彼は『歴史』のなかでその経緯について次のように述べている。

57 私が調査して調べて明らかにしたところでは、今日ポイオティアと称されている地方に、カドモスとともに移住してきたフェニキア人であり、この地方のタナグラ地区を割当てられて定住していたものであった。..... 58 カドモスとともに移住してきたフェ

ニキア人たちは一……一、この地方に定住して、ギリシア人にいろいろな知識をもたらした。中でも文字の伝来は最も重要なもので、私の考えるところでは、これまでギリシア人は文字を知らなかったのである。フェニキアの移住民たちは、はじめは他のすべてのフェニキア人の使うのと同じ文字を使用していたが、時代の進むとともにその言語を（ギリシア語に）変え、同時に文字の形もかえたのである。とうじこのフェニキア人と境を接して住んでいたのは、大部分がイオニア人であったが、この文字をフェニキア人から習い覚え「フェニキア文字」と呼んでこれを使用したのである。フェニキア人がギリシアへ伝来したものであるからこの呼称は正しいといわなければなるまい。イオニア人はまた、昔から紙のことを「皮」といっているが、これはイオニアではむかし紙の入手がむづかしく、山羊や羊の皮を紙代わりに使っていたことによるもので、今の時代でも、このような獣皮書写している異民族はすくないのである⁴⁴。

このヘロドトスの記述は錯誤を免れない部分が見られるにせよ、概ね今日においても妥当する⁴⁵。彼が言うように、ギリシア人がフェニキア人から

44 ヘロドトス 松平千秋訳『歴史』(中)岩波文庫、岩波書店、1996年、151-152頁参照。

45 他方、アラム語、北シリア語、非セム語系である小アジアのフリギアなどの文字を初期ギリシア文字の母体と考える研究者もいる。興味深い仮定としてはフェニキア文字の直系であるアラム文字であろう。アラム文字碑文は前9—8世紀に主としてシリアで発見されている。最古のギリシア文字碑文とほぼ同時代であり、フェニキア文字を受容しながら母音や独自の文字も発達させた。所謂肥沃な三日月地帯で広く使用され、ペルシア時代は国際語ともなった。したがって確かに前8世紀のギリシア人が直接アラム人と接触する機会があったと考えられる。例えばアラム人の故郷である東北シリアにはアナトリアを通り抜けてギリシアに通ずる交易ルートがあり。これが初期ギリシア語文字の接触の機会であった可能性がある。

Cf. S. Segert, “Altaramäische Schrift und Anfänge des griechischen Alphabets,” *Klio* 41 (1963), 38-57; E. A. Knauf, “Haben Aramäer den

文字を獲得したという伝承は確かであろう。この事実は双方の文字の名称が類似していることや文字の表記法やアルファ（alpha）からタウ（tau）までの文字の配列順によって確かめることができる。

ギリシア人が文字を借用するのはこれが初めてではなかった。ギリシア人が地中海沿岸、わけても東地中海拠点にした海上貿易で繁栄していく過程で幾つもの言語や文字と出会う機会はあった。音節文字のキュプロス文字⁴⁶とクレタ線文字B⁴⁷を使用するという試みはあったが、実際は様々な

Griechen das Alphabet vermittelt?" *Welt des Orients* 18 (1987), 45-48. 難点としては、前8世紀はフェニキア人が地中海交易とギリシア周縁地域で広範に居住地を建設し、ギリシア人と日常的に接触しうる環境下におかれていたのに対し、アラム人の活動は西アジア（フェニキア地方を除く）、小アジア、エジプトからインドと陸上交易を中心にしていたことであろう。とりわけアラム文字の受容と影響に関しては西アジアより東の諸文字に明らかである。

46 キュプロス＝ミノア文字として知られる。前2000年期キプロス島で使用された音節文字であり、約85個の記号を持つ。資料としては前16世紀から11世紀中葉に及ぶ。主な出土地域はキプロス島全島、及び対岸のシリア北部の古代都市国家ウガリットからも発見されている。楔形文字圏に属するウガリット王国との密接な関係を考慮すると、文字形態は多様であるにせよ、粘土板を書材として使用したものが多く、楔形に類似する文字である。おそらくウガリットのクレタ人から文字を学習したとおもわれる。クウクリアで発見された前11世紀に属する資料はキプロス音節文字表記のギリシア語含んでいる。アルベルティーン・ガウアー『文字の歴史』33頁参照。

47 クレタ島から3種類の形態を取る文字が出土している。最古の文字はクレタ聖刻文字といわれ、絵文字、象形文字のような具象性が強い文字で、前2000年紀に遡る。それ以降現れる文字は英国の考古学者アーサー・エヴァンスによって線文字A、それから発達した文字を線文字Bと呼称された。今日より分かりやすい総称ミノア線文字A、ミノア線文字Bが用いられている。線文字Aの資料は大部分前17世紀中葉から前15世紀中葉にかけて出土している。線文字Aの音価の確定は大凡できるようになったが、この言語の解読について諸説あり、いまだ解読には至っていない。線文字Bは線文字Aに改良を施し、発展させた文字形態で15世紀中葉から前13世紀に属する文字である。線文字Bは解読されたて分かってきたことは、ギリシア語との間には大

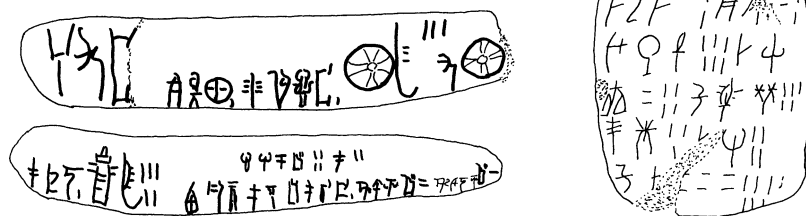
困難があつてギリシア語には不向きな文字であつたため使用期間はごく限られ、地域も限定的であつたようである。ただこれらの文字の存在とギリシア本土や島嶼さらに東地中海に隣接する諸国との接触はギリシア文字誕生の前兆であつたに違いない。ギリシア人がフェニキア文字を採用するさい、フェニキア文字も決して十全な文字ではなかつた、子音文字であつたフェニキア文字は、ヘロドトスが指摘するように、ギリシア人はフェニキア文字から必要な母音文字の転用を図ったり、字形に改変を加えたが、それはギリシア人に固有な音声に沿つたものであつた⁴⁸。フェニキア地方、広

きな隔たりがあることと線文字Aと線文字Bには基本的に同様な性格をもつことである。線文字Bは文字資料がクレタのクノッソスをはじめ多くの遺跡から大量の資料が出土したことに加え、ギリシア本土ピュロスから発掘された資料から解読への道が開けた。

ジョン・チャドウィック 細井敦子訳『線文字B』大英博物館双書3，学芸書林，1996年，図21-22 66頁並びに図27 82頁参照。

線文字A：ハギア・トリアダ粘土板

線文字B：クノッソス粘土板（上）とピュロス粘土板（下）



48 フェニキア文字'alep /' (声門音) はギリシア文字の A (アルファ)/a/ となった。フェニキア文字 he はギリシア文字では E (エプシロン) とされた。フェニキア文字 yod はギリシア文字の I (イオタ)/i/ となった。フェニキア文字 'yin /' (声門音) はギリシア文字の O (オミクロン)/o/ として使用された。フェニキア文字にはない音声については、キプロス文字から採用したと思われる 2 重子音記号を加えた。Φ (フィー) は P + h の音声/ph/ を表し、X (キー) は k + h で/kh/ を、そして Ψ (プシー) は P + s の音声/ps/ を表した。ギリ

くはレヴァント地域一帯で使用されていたカナン語と、文字の形態や名称、さらに音価にいたるまで極めてよく類似することから双方の文字の相関関係は揺るぎないと確信できる。問題はギリシア人によるフェニキア文字の受容が、いつごろ、どのようにして、どこで発生したかということであろう。

受容の時期については、大きく二分される。つまり、ギリシア語研究者は前8世紀頃を取るが、セム語研究者前は12—11世紀頃を考え、双方の見解には大きな隔たりがある⁴⁹。前8世紀と考える最大の根拠は今のところ前8世紀以前に遡るギリシア文字碑文が発見されていないことである。さらに最古のギリシア文字が前9—8世紀頃のフェニキア文字に最もよく似ていること⁵⁰、そして前8世紀はギリシアとオリエントの交易等が極めて盛んであったことなどが挙げられる。

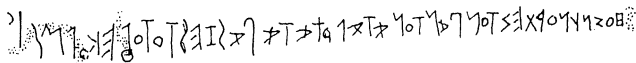
他方、セム語研究者は最古のギリシア文字がフェニキア文字を含む北西セム語の祖先と想定できる前12—11世紀の原カナン文字と極めて類似することをその論拠としている。初期ギリシア文字は、形態において、また書

シア文字 Υ (ウブシロン)/y/はおそらくフェニキア文字 wau (ワーウ) を使用した。必要な長母音には特別な文字をあてた。長母音 (o:) は単母音 O の下部を開いて Ω (オメガ) を作った。さらに長母音 /ε:/ は H (エータ) フェニキア文字の h^{et} に由来する。

49 P. Swiggers, “Transmission of the Phoenician Script to the West,” P. T. Daniels, (et al. eds.), *The World's Writing Systems*, 267.

50 ディピュロンからの壺の銘文（前800年 アッティカ出土）右から左に書かれている。

松本克己「ギリシア文字」,『別冊世界文字事典』『言語学大事典』,326頁 図3参照。

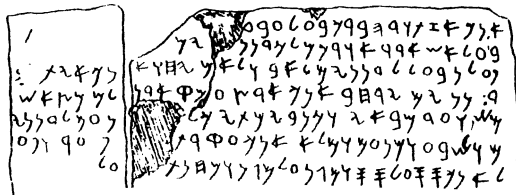


hos nun óρχεσθὼν παντὸν ἀταλῶταται παιζεῖ

ヨセフ・ナヴェー『初期アルファベットの歴史』,68頁 図46参照。カラテペのフェニキア文字の一部分

字方向⁵¹が一定していないことにおいても原カナン文字と共通する。さらに各地で発見された前8世紀頃と考えられる初期ギリシア文字は土器に刻んでいたが、それ以前の書材は皮や木材の上に文字を書いており土器よりも朽ちやすかった。この時代が1—2世紀間あったと推測する。さらに地域的文字の変種が顕著であることも、ギリシア文字の成立年代を前8世紀以前に遡らせる論拠の一つとなっている。こうした地域的文字の多様性は当時小規模な都市国家が政治的にも不安定であったことの反映と受けとめられている。ギリシア文字の地域的変種はいずれにせよレヴァントのカナン文字の受容の段階で発生したと考えられる。

では、ギリシア文字が最初に生まれた場所はどこであろうか。レヴァントのギリシア人居留地とクレタ島などエーゲ海の島々が候補地として挙げられている。ギリシアと西アジアとの交流は前8世紀になると盛んになる。交易によってレヴァント地域にはギリシア人の居留地が形成された。C. L. ウーリーの発掘によって明らかにされた北シリアのアル・ミナ⁵²もその一



上記碑文1行の音写：'nk 'ztwd hbkr / b'l 'š 'wrk mlk dnnym

- 51 右書き(右から左へ横に書く)刻文, 左書き(左から右へ横に書く)刻文, 牛耕体(牛を用いて畑を耕すように左右交互に往復して書く)刻文などがある。最初期のギリシア文字碑では一般に文字方向はフェニキア文字同様右から左に書かれた。左から右に固定して書かれるのは法律によって前403頃にアテナイ市民公式文書にイオニア式アルファベットの使用を強要したことに始まる。このイオニア式アルファベットが最終的には他を圧倒し今日のギリシアやその後の欧米諸国の文字の原形となった。

- 52 アル・ミナ(北シリア)はオロンテス河口に開かれた港湾古代都市である。約1500点のギリシアの幾何学文様土器が出土している。多くはギリシアの

つである。ギリシア人とカナン語を話す住民との日常的な接触がギリシア文字を誕生させた地域と考えられている。最初期の銘文がギリシア本土の東、エウボエア地方のレフカンディ⁵³から出土していて、アル・ミナとの密接な交易が考古学的に明らかにされた。前8世紀頃のエウボイアの陶器がギリシアの交易拠点の一つであった北シリアのアル・ミナで発見された陶器の中でも最初期の部類に属することは偶然というよりも、両都市の密接な交易を示唆すると考えられる。文字の伝播経路としてレヴァントで誕生した文字がギリシア本土に持ち込まれたのではないかと注目されている⁵⁴。

一方エーゲ海に位置するクレタ島、テラ島やイオニア海のコルキラ島において発見された初期ギリシア文字が、ローカルなギリシア文字の中で最もフェニキア文字に近い特徴を備えていることからギリシア文字成立の有力な候補地とされている。この場合は、アル・ミナのケースと異なり、これらの島々にカナン人の来訪を想定する必要がある。1970年代にクレタ島のクノッソス周辺のテッケから初期フェニキア語の銘文⁵⁵を刻んだ青銅板が出土しているが、前11世紀のものと推定される。青銅杯が副葬されてい

エウボイアのものと考えられる。なぜなら現地アル・ミナで作られた痕跡はなく、ギリシアのエウボイ人が持ち込んだ可能性が高い。この地域でギリシア人の交易は前9—6世紀まで続いた。

53 最近（1981—1983年）レフカンディ遺跡（ギリシア本土の東、エウボイア島のエウボイア湾岸にあった古代遺跡）からは前10世紀には東方との関係する奢侈品が発見されている。具体的遺物として小型円筒印章（前1800年頃北シリアで製作された）、交易に必要とされる青銅及び石製の文銅（フェニキアやキプロスの秤と推定される）またシリアやエジプトの護符なども出土している。

54 プライアン・クック 細井敦子訳「ギリシア語の銘文」『大英博物館双書』5、学芸書林、1996年、17-19頁参照。

55 M. Sznycer, “L’inscription phonécienne de Tekke, près de Cnossos,” *Kadmos* 18 (1979), 883-93.; F. M. Cross, “New Found Inscription in Old Canaanite and Early Phoenician Script,” *BASOR* 238 (1980), 15-17.; ヨセフ・ナヴェー 『初期アルファベットの歴史』、50頁参照。

た墳墓は、埋葬形式から見てフェニキア人のものと推察される。腕の肩部分に碑文が刻まれている。このことは当時のクノッソスにフェニキア人の居留地が存在した可能性を示している⁵⁶。

おわりに

文字と言語の発展をその発端から観察すると、意外にも文字を使用した諸民族の歴史的事情や特徴が浮き彫りにされる。つまり文字装置の形成は民族の歴史的・文化的要因と密接に関係していたのである。文字と言語はすぐれて諸民族の文化を写しとる鏡であることが理解できよう。今日日常的に世界中で目にする印欧諸語の文字、とりわけギリシア語文字に出自をもつ英語によるアルファベットには西アジアの文字の系図がいかに反映してきたかを観ることができる。言語語族は異なっても文字は音韻体系を乗り越え柔軟に対応し、改善と改変を加え自らの文字としてきた。確かにアッカド・シュメール文字やエジプト文字は中央集権化する国家都市国家や帝国において一部の特権階級の文字となった。高度の文字教育が必要とされた。アルファベット文字の誕生は前2000年紀末以降海上においてまた陸上において交易が隆盛をきわめ、諸民族と諸文化が出会い、文化的エネルギーを活性化させた。文字の受容はそうした活力の恩恵を受けた好例で



ks. šm(. ben l) [.....]

[.....]の息子シェマアの器

- 56 M. Szynycer, “L’inscription phonécienne de Tekke,prè se Cnossos,” *Kadomus*, 18 (1979), 89–93; 解読については F. M. Cross, “Newly Found Inscription in Old Canaanite and Early Phoenician Script”, *BASOR* 238 (1980) 2–4.; ヨセフ・ナヴェー 『初期アルファベットの歴史』, 50 頁参照。岡田泰介 「ギリシアとオリエント」 『地中海月報』 291 (2006), 10 頁参照。

あろう。これまでの検証から概観できることは、シュメール・アッカド文字体系とエジプト文字体系の関係を不問にすれば、エジプト文字は形を変容しながら、原シナイ文字、フェニキア文字、初期ギリシア文字、ラテン文字にいたるまで生き続けている。アルファベット文字は 5000 年以上にわたって人類が構築してきた文化遺産といえよう⁵⁷

エジプト 文字	原シナイ 文字	フェニキア 文字	初期ギリシア 文字	ギリシア 文字	ラテン 文字
				Α	A
				Β	B
				Γ	G
				Δ	D
				Κ	K
				Μ	M
				Ν	N
				Ξ	X
				Ρ	R
				Τ	T
				Σ	S

57 スティーブン・ロジャー・フィシャー『文字の歴史』62 頁 図 28 参照。

以上の考察から古代オリエント（エジプトを含む）に展開した文字の系統図は次のように纏められよう。

